

兼好の恋愛観

— 女性の位置づけをめぐる —

兼好は「万にいみじくとも、色このまざらん男は、いとさうざうしく、玉の厄の當なきこちぞすべき」^注（第三段）と、男が万事にすぐれていても、恋愛の情を解しなかったら、とても殺風景なことだと説いている。「色好む」という語は平安時代以来、貴族社会に用いられて、いわば男女間における恋愛の情趣をよく解することを表した言葉である。恋について詠んだ歌は文字ができる以前から、口誦の形で人々の間に伝わっていた。中国で一番早い詩集の『詩経』の巻頭に「関雎」という四言古詩がある。^注

関関雎鳩 （関関たる雎鳩は

在河之洲 河の洲に在り

窈窕淑女 窈窕たる淑女は

君子好逑 君子の好逑

品よく愛らしいよき娘は、すてきなお方にぴったりのつれあいだということである。また、日本で現存する最古の歌集、『万葉

劉 若 芬

集』の中心的な部立である「相聞」にも恋愛の歌が多い。恋愛は兼好にとって、いったいどういふうに捉えられているか。そして女性に対して、どんな位置づけをしているか。兼好におけるこれらの独自の考え方を確認していきたい。

万の事も、始終こそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをばいふものは。逢はで止みにし憂さを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとり明し、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔を偲ぶこそ、色好むとはいはめ。

（第三百七十七段）

恋の情趣も男女が現実と逢っている場面にのみあるのではない。実を結ばない恋、すでに過去のものとなってしまった仲にこそ、深く味わうべきものがあり、それを我が物とすることこそ、色を好むことなのだ。兼好は言う。男女間の情は、ただ二人の恋情が達成されることだけではない。思慕の情のかなえられない悲恋も、また恋の追憶も、「待つ心」「しのぶ心」も恋の醍醐味なのである。

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがり言ふべき事ありて文をやるて、雪のこと何ともいはざりし返事に、「この雪いかゝ見ると、一笹のたまはせぬほどの、ひがひがしからん人のおほせらるゝ事、聞きいるべきかは。返々口をしき御心なり」と言ひたりしこそ、をかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりの事も忘れがたし。

(第三十一段)

雪が趣深く降つた朝、ある人に所用のために手紙を届けたが、雪のことには一言も触れなかった。その返事に、「そんな粗野なお方の仰せを受け入れるわけにはいきません」と答かれて来た。この段の主題は、「返事」の文面に現れている、純粹かつ率直に自分を非難した、「亡き人」の性格にある。返事のことばづかいから、この相手は女性とみられており、次の第三十二段と同じ、兼好ごのみの女性像として描き出されていると考えられる。

九月二十日の比、ある人にさそはれたてまつりて、明るまで月見ありく事侍りしに、おほしいづる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂ひ、しめやかにうち薫りて、しのびたるけはひ、いものあはれなり。よきほどにて出で給ひぬれど、なほ事ざまの僕におおえて、物のかくれよりしばし見るたるに、渡戸を今少しおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。跡まで見る人ありとは、いかでか知らん。かやうの事は、たゞ朝夕の心づかひによるべし。その人、ほ

どなく失せにけりと聞き侍りし。

(第三十二段)

この女性について見るに、まずしのび住みのけはい、わざとならぬ薫物の用意、さらには自然となごりを惜しむ姿、すべてが兼好の好みそのままであるが、彼はこれを「朝夕の心づかひ」によるものであるとしている。兼好は人の死後の印象・痕跡がこの世から消滅してゆく過程を述べていた。そういう無常遷流の世にも、なお人間の真実・真情が、死後のいまでも、自分の心に残り止まっている趣を述べたものと考えられる。

「久しくおとづれぬ比、いかばかり恨むらんと、我が怠り思ひ知られて言葉なき心地するに、女の方より、「仕丁やある、ひとり」など言ひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよき」と、人の申し侍りし、さもあるべき事なり。

(第三十六段)

前の二段を受けるこの段は、男が無沙汰続きをすまなく思っている時、気軽に用事をいつてよこすような女がよいという話である。どうしてこのような女が「ありがたくうれしけれ」と評されるかという問題には、従来二つの解釈がある。一つは西尾実説で「その、男を信じて、少しも疑うところのないのを、男が「ありがたく、うれしけれ」と讃め、「さる心ざましたる人ぞよき」と認めている」とするものである。また、一つは、久保田淳説で「男にばつの悪い思いをさせずに、さりげなく音信のきつかけを作つてやる賢さが、「ありがたくうれし」いのだ」と説くもので

ある。東洋でも西洋でも、物語には信念を持った女主人公が登場し、さんざん苦勞をして、ようやく男主人公と会うという話が少なくない。たとえば、『伊勢物語』の有名な第二十三段「筒井筒」にも次のような話がある。

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、大人になりにければ、おとも女も恥ぢかはしてありけれど、おとはこの女をこそ得めと思ふ。女はこのおとこをと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでなんありける。さて、この隣のおとこのもとよりかくなん。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべきなどいひひて、つゝに本意のごとくあひにけり。

さて、年ごろ経るほどに、女、親なくたよりなくなるまに、もろともにいふかひなくてあらんやとはとて、かうちの国、高安の郡に、いきかよふ所出できにけり。さりけれど、このもとの女、悪しと思へるけしきもなく、出しやりければ、おとこ、こと心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、前栽の中にかくれるて、かうちへいぬる顔にて見れば、この女、いとう假粧じて、うちながめて

風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらん

とよみけるをききて、限りなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。(下略)

夫の不行跡を知りながらも、ひたすらその身を案じてよんだ「風吹けば」の歌が、男の心を再びとりもどす重要な契機となっている。『徒然草』の第三十六段のこの女も、こういう辛抱強い人なのかもしれない。次に、兼好が手厳しい女性論を説く第七段からこの問題の答えを見付けてみよう。

女の物言ひかけたる返事、とりあへずよきほどにする男はありがたきものとて、龜山院の御時、しれたる女房ども、若き男達の参らるゝ毎に、「郭公や聞き給へる」と問ひて心みられるに、なにがしの大納言とかやは、「数ならぬ身は、え聞き候はず」と答へられけり。堀川内大臣殿は、「岩倉にて聞きて候ひしやらん」と仰せられたりけるを、「これは難なし。かずならぬ身、むつかし」など定め合はれけり。すべてをのこをば、女に笑はれぬやうにおほしたつべしとぞ。「浄土寺前関白殿は、幼くて、安喜門院のよく教へ参らせさせ給ひける故に、御詞などのよきぞ」と、人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は、「あやしの下女の見奉るも、いと恥づかしく、心づかひせらるゝ」とこそ、仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣文も冠も、いかにもあれ、ひきつくるふ人も侍らじ。かく人に恥ぢらるゝ女、如何ばかりいみじきものと思ふに、女の性は持ひがめり。人我の相深く、貪欲

甚だしく、物の理を知らず、ただ迷ひの方に心も早く移り、

詞も巧みに、苦しからぬ事をも問ふ時は言はず。用意あるかと見れば、また、浅ましき事まで、問はず語りに言ひ出す。

深くたばかり飾れる事は、男の智慧にもまさりたるかと思へば、その事、跡より頭はるゝを知らず。すなほならずして、拙きものは女なり。その心に従ひてよく思はれん事は、心愛かるべし。されば、何かは女の恥づかしからん。もし賢女あらば、それものうとく、すさまじかりなん。ただ迷ひを主としてかれに従ふ時、やさしくも、おもしろくも覚ゆべき事なり。

(第百七段)

女の本性は、すべて、ねじけたものである。女は自我に執着する状態が深く、やたらに欲が強く、物の道理を解さない。心が率直でなくて、愚劣なのは、女というものである。万一、才智のすぐれた女がいるとしても、それも、何となく親しみがなく、魅力がないに違いない。と、兼好はこのように、女を激しく批判し否定している。この点については、後述するが、第三十六段の女主人公は本性のまま行動するでもなく、いわゆる「賢女」でもないと推察できる。従って、私は西尾実説に賛同するのであるが、次のような女性を兼好ごのみに考えたい。第三十一段、三十二段、三十六段に描かれたように純粋で率直で自然となごりを惜しむ姿こそが兼好の理想とする女であり、こまやかな心遣いのできる女性像を、彼は求めたのである。

二

さらに女の本性があらわに描かれているのは第百七十五段の次の一節である。

人の上にて見たるだに心愛し。思ひ入りたるさまに、心にくしと見し人も、思ふ所なく笑ひののしり、詞多く、烏帽子ゆがみ、紐はづし、脛高くかかけて、用意なき気色、日來の人とも覚えす。女は額髪はれらかに掻きやり、まばゆからず顔うちささげてうち笑ひ、盃もてる手にとりつき、よからぬ人はさかな取りて口にさしあて、みづからも食ひたる、様あし。声の限り出して、おのおの謡ひ舞ひ、年老いたる法師召し出されて、黒くきたなき身を肩抜きて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへ、うとましく憎し。

(第百七十五段)

酒を飲むと、老若貴賤男女を問わず、本性のままを表わすことが少なくない。礼儀にかなわない誇張した仕草をして、大声を張り上げている姿、とくに女の酔態は兼好にとって、どうにもたまらない醜態・下品な振舞として退けられるのである。

妻といふものこそ、をのこの持つまじきものなれ。「いつも独り住みにて」など聞くこそ、心にくけれ。「誰がしが婚に成りぬ」とも、また、「如何なる女を取りすみて、相住む」など聞きつれば、無下に心劣りせらるゝ、わざなり。異なる事

なき女をよしと思ひ定めてこそ添ひめたらめと、賤しくもしはかられ、よき女ならば、らうたくして、あが佛とまもりぬたため、たとへば、さばかりにこそと覚えぬべし。まして、家の内を行ひ治めたる女、いと口をし。子など出できて、かしづき愛したる、心憂し。男なくなりて後、尼になりて年寄りたるありさま、亡き跡まで浅まし。いかなる女成りとも、明暮添ひ見んには、いと心づきなく、憎かりなん。女のためも半空にこそならめ。よそながらときとき通ひ住まんこそ、年月経ても絶えぬなからひとならめ。あからさまに來て、宿り居などせんは、珍らしかりぬべし。

(第百九十段)

この段と、次に示す第二百四十段は、結婚否定論、特に、同居婚に対する否定的な見解を説いたものである。つまり、恋愛は情趣があるが、結婚は味気ない、という意見である。兼好によると、女とは「迷ひを主としてかれに従ふ時」(第百七段)こそ優雅にも魅力的にも感じられる対象である。したがって、いわば非日常的な世界で出会うべきその女を、「妻」として日常的な場の中に導き入れたら堪え難い違和感が生まれるはずである。

しのぶの浦の蜚の見るめも所せく、くらふの山も守る人しげからんに、わりなく通はん心の色こそ、浅からず哀と思ふふしぶしの、忘れがたきことも多からめ。親・はらからゆるして、ひたふるにむかへ据ゑたらん、いとまばゆかりぬべし。

世にあり侘ぶる女の、似げなき老法師、あやしの吾妻人なり

とも、賑は、しきにつきて、「誘ふ水あらば」など云ふを、仲人、何方も心にくきさまに言ひなして、知られず、知らぬ人をむかへもて來たらんあいなさよ。何事をか打ちいづる言の葉にせん。年月のつらさを、分けこし葉山の」などもあひかたらはんこそ、盡きせぬ言の葉にてもあらめ。すべて、余所の人の取りまかなひたらん、うたて、心づきなき事多かるべし。よき女ならんにつけても、品くんだり、見にくく、年も長けなん男は、かくあやしき身のために、あたら身をいたづらになさんやはと、人も心おとりせられ、我が身は、むかひゐたらんも、影はづかしく覚えなん。いとこそ、あいなからめ。梅の花かうばしき夜の臘月に佇み、みかきが原の露分け出でん在明の空も、我が身さまにしのばるべくもなからん人は、たゞ色このまざらんにはしき。 (第二百四十段)

他人に用意され、認められた結婚をいとわしいとするもので、人目をばかりつつ営まれるいわゆる忍ぶ恋や、苦難をしのいで結ばれた男女の仲などは容認している。この二つの段で、兼好の論じる理論はいずれも主観的すぎ批判的すぎるに違いない。三木紀人氏が解説されているようによほどラディカルな人間論か、でなければ、一生結婚することなく終わった男の嫉妬の情を背後に見ないかぎり、にわかに理解できない論である。たとえば、「詩経」の「邶風」に次のような古詩がある。

死生契闊 (死生契闊)

與子成説 子と説りを成しぬ

執子之手 子の手を執り

與子偕老 子と偕に老いんと

死んでも生きてもどんな苦勞があろうとも、あなたとの間にはちゃんとした約束がある。あなたの手をにぎったまま、あなたと一緒に白髪になるまで夫婦でいようと誓う。「いかなる女成りとも、明暮添ひ見人には、いと心づきなく、憎かりなん」(第百九十段)という兼好の考えと違って、これが男女、夫婦の間の情に於いての積極的、肯定的な考えというものであらう。

三

風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、なれにし年月を思へば、あはれと聞きしことの葉とに忘れぬものから、我が世の外になりゆくならひこそ、亡き人のわかれよりもまさりてかなしきものなれ。

(第二十六段)

この一文は、ある女性とほんとうに親しみ、愛し合ったにもかかわらず、別れてしまった切ない経験が兼好にあったがために書かれたものであるに違いない。「兼好法師集」には、そのような体験の痕跡とおぼしきものをいくつも見付けることができる。^註

たのもしげなることいひて、たちわかるる人に

はかなしやいのちも人のことのはもたのまれぬ世をたのむわかれは

つらくなりゆく人に

いまさらにかはるちぎりとおもふまではかなく人をたのみけるかな

わすらるる恋

わればかりわすれずしたふ心こそなれても人にならはざりけれ

兼好の出家の動機が何であつたかは、今ではつきとめえない。しかし、彼の出家は三十歳前後の時のことであるから、出家の原因のひとつに、失恋にかかわることがあつたのではないかという推測が成り立つ。「世の人の心まとはす事、色欲にはしかず。人の心は愚かなるものかな」(第八段)という久米仙人のことを例として挙げた兼好は、人間の色欲の迷いが官能による自然の触発であることを肯定する。しかし、「愛着の道」の「みづから戒めて、恐るべく慎しむべきは、この惑ひなり」(第九段)という男女の愛着の道への戒めには、兼好の女への無関心を示すのではなく、女という捉えがたい心理や存在に対する恐怖と臆病な心を指摘できるのではないか。

二月十五日、月明き夜、うちふけて、千本の寺にまうでて、うしろより入て、ひとり顔ふかくかくして聴聞し侍りに、優なる女の、姿・匂ひ、人よりことなるが、わけ入て膝にあかれば、にはひなどもうつるばかりなれば、便あしと思ひて、すり退きたるに、なほるよりて、同じ様なれば、立ち

ぬ。その後、ある御所さまのふるき女房の、そゝろごと言はれしついでに、「無下に色なき人におはしけりと、見おとしたてまつることなんありし。情なしと恨み奉る人なんある」とのたまひ出したるに、「更にこそ心得侍らね」と申しやみぬ。この事、後にき、侍りしは、かの聴聞の夜、御つばねの内より人の御覧じしりて、候ふ女房をつくりたてていだし給ひて、「びんよくは、言葉などかけんものぞ。その有様参りて申せ。興あらん」とて、はかり給ひけるとぞ。

(第二百三十八段)

涅槃会の夜、千本釈迦堂において、ある人の意を体した美女に誘惑された時、その悩ましい誘惑に乘らず、無視と沈黙とを選んで済ませた用心深さを、兼好はこのように自賛している。「女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ」(第三段)と説き、厳しい女性観を持っていた人の、男性らしい慎重さと自覚がよくうかがえる一節である。が、兼好が匂わせているような慎重な振舞いというよりも、本能的な恐れによる退却なのだと、言うべきかもしれない。

四

『徒然草』には、兼好と同時代に生きた若い女性としては、延政門院(第六十二段)と今出川院近衛(第六十七段)の二人しか登場しない。そのほか、具体的に登場するのはや老女となつ

た女達だけである。女への返事のしかたを浄土寺の関白に教えたと伝えられる安喜門院(第百七段)、沓冠り歌で父帝への思いを伝えたという幼い日の延政門院の逸話(第六十二段)、新築の内裏の清涼殿の櫺型の窓の縁が、手本とした閑院殿と違っていたことを証言した玄奘門院の逸話(第三十三段)、内侍所の神楽に持ち出される剣が、三種の神器の一つの宝剣ではなく、清涼殿の昼の御座にある剣であると、ひそかに訂正した「古き典侍」(第百七十八段)など、過去の時代をさながら継承するように、故実を伝える老女女達の姿は、森嚴な存在感を『徒然草』の中で、主張している。つまり、兼好の「女」への思いは、現実における失恋を経て、古きものへの愛着と執着に象徴されるようなかたちで転換されたのではないか。非日常の世界で、思いがけず出会った趣味の好い女にひかれるというのも、非日常性に立脚したものであるがためで、その女は死後もなお、兼好の中に美しい面影を残した。

そして、相次ぐ戦乱や、持明院統・太覚寺統の両皇統の対立などで揺れ動いた十四世紀前半に生きた兼好が、女流文学の栄えた輝かしい王朝の風雅への憧憬と思慕の感覚に浸ったところにも共通の意識を汲み取ることができる。

「祭過ぎぬれば、後の葵不用なり」とて、或人の、御簾なるをみな取らせられ侍りしが、色もなく覚え侍りしを、よき人のし給ふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、周防内侍が、

かくれどもかひなき物はもろ友にみすの葵の枯葉なりけり

と詠めるも、母屋の御簾に葵のかゝりたる枯葉を詠めるよし、家の集に書けり。古き歌の詞書に、「枯れたる葵にさしてつかはしける」とも侍り。枕草子にも、「来しかた恋しき物、枯れたる葵」と書けるこそ、いみじくなつかしう思ひ寄りたれ。鴨長明が四季物語にも、「玉だれに後の葵は留りけり」とぞ書ける。己と枯るゝだにこそあるを、名残なく、いかゞ取り捨つべき。御帳にかゝれる薬玉も、九月九日、菊に取りかへらるゝといへば、菖蒲は菊の折までもあるべきにこそ。

枇杷皇太后宮かくれ給ひてのち、古き御帳の内に、菖蒲・薬玉などの枯れたるが侍りけるを見て、「折ならぬ音をなほぞかけつる」と辨の乳母のいへる返事に、「あやめの草はありながら」とも、江侍徒が詠みしぞかし。(第百三十八段)

賀茂祭の後、簾に掛けられていた葵を取り捨てさせる「よき人」がいた。その事を無風流なことに感じた兼好は、古典の文章から「よき人」の行為の不当さの証となるものをあげている。葵の艶な雰囲気が現れるこの段には、兼好の王朝的みやびの世界への懐古情緒をはつきり見ることができ^せる。

とこしなへに遠順につかはるゝ事は、ひとへに苦楽のためなり。楽といふは、このみ愛する事なり。これを求むることやむ時なし。楽欲する所、一つには名なり。名に二種あり。行

跡と才芸との誉なり。二つには色欲、三つには味なり。万のねがひ、この三つにはしかず。これ、顛倒の相よりおこりて、若干のわづらひあり。もとめざらんにはしかじ。

(第二百四十二段)

物事を好み愛することから、さまざまな願いを求めることになる。この願いは、誤った思いから生まれるもので、多くの苦悩を伴う。だから、兼好は願望を持たないほうがよからうと力説している。第九段で「六塵の楽欲おほしといへども、皆厭離しつべし。その中に、ただ、かの惑ひのひとつ止めがたきのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚かなるも、かはる所なしとみゆる」と書いていた。願望は一切持たないほうがよからうと言い、また、「色欲」の迷いだけは止めることが難しいとも書いている兼好は、「女」に対して、「男女の情」に対して、やはり解決できないでいたと言わざるを得ない。

物事を深く考えている兼好は、「男女間の情」も鋭く見透かしていた。恋は風も吹きあえず散ってゆく花だとも説いている。「よそながらときどき通ひ住まんこそ、年月経ても絶えぬからひとともならぬ。あからさまに來て、宿り居などせんは、珍しかりぬべし」(第百九十段)と論じた兼好は、人の心も世と同じく刻々変わって行くために、通ひ婚を認めたのだらう。兼好にとつて、現実の女は愚かで、醜く、捉えどころのない存在であった。日常の場面において、純粋で率直で自然となごりを惜しむ女は

めったにいない。それに対して、非日常的な場面の女は、隔てられた向う側の世界で、抑えられた思いを解き放つべく、あくまでも、理想的に美しく存在したのである。

兼好は、日常的生活空間における女の本性を批判し、自らの体験もあつてか、本能的に女との接触を避けていたあしがある。また、結婚という形で制度化された男女の関係を否定した。しかし、色好みを認め、恋の情趣を理解していた点、そして理想的な女性像として、趣味がよく、つつしみ深い女を描いている点から考えると、兼好にとつて、恋愛や女性像は一つの美意識として捉えられたものであつたのではなからうか。

十七年。

注7 注2に同じ。

注8 『兼好法師集』の引用は、『新編国歌大観』第四巻所収本による。

注9 三田村雅子「後の美―徒然草の「女」」(『国文学』平成元年三月号)。

(参考文献)

安良岡康作『徒然草全注釈』上巻・下巻 昭和四二―四三年角川書店

富倉徳次郎・貴志正造 鑑賞日本古典文学第十八巻「方丈記・徒然草」昭和五十年角川書店

(岡山大学大学院文学研究科)

研究室受贈図書雑誌目録(一)

金沢大学語学・文学研究(金沢大学教育学部)第二十号

金沢大学国語国文(金沢大学国語国文学会)第16号

花葉(「花葉」発行所) 6

岐阜女子大学紀要 第20号

九州大谷国文(九州大谷短期大学)第二十号

京都府立大学学術報告 人文 第42号

金城国文(金城学院大学)第67号

代文学論集(日本近代文学会九州支部)第17号

群馬県立女子大学紀要 第11号

群馬県立女子大学国文学研究 第11号

注1 『徒然草』の引用は、日本古典文学大系本(岩波書店)による。以下同じ。

注2 『詩経』の引用は吉川幸次郎『詩経国風』上(中国詩人選集1、岩波書店、昭和三十三年)による。

注3 安良岡康作『徒然草全注釈』上巻(角川書店、昭和四十二年)一八ページ。

注4 久保田淳『徒然草を読む』(『別冊国文学・徒然草必携』一九八一年)。

注5 『伊勢物語』の引用は、日本古典文学大系本(岩波書店)による。

注6 三木紀人『徒然草全訳注』(『講談社学術文庫』昭和五十四年―五